

積極的生徒指導体制の確立をめざして

北海道釧路湖陵高等学校 教頭 矢橋 佳之

1 本校の概要

本校の位置する釧路市は、人口約 17 万 7 千人（平成 27 年 3 月末現在）を抱える北海道東部の中核的都市である。長く釧路市の経済を支えてきた基幹産業は漁業、石炭採掘業、紙・パルプ業であったが、近年はいずれも縮小・衰退の傾向にある。平成 17 年 10 月には近隣の阿寒町・音別町と合併し、全国第 7 位の広さとなった。域内には釧路湿原・阿寒という 2 つの国立公園を抱え、漁業、農林水産業、紙・パルプ、食品などの製造業、石炭産業、観光など、あらゆる産業が集積した厚みのある産業構造となることが期待されている。

その釧路市に立つ本校は、市政開始の翌大正 12 年、私立釧路商業中学校夜間として開校したところから数え、今年で開校 93 年目を迎える伝統ある夜間定時制高校である。

昭和 31 年に 4 間口までになったが、昭和 50 年に 3 間口、昭和 57 年に 2 間口、平成 9 年に 1 間口と縮小を続けてきた。平成 23 年入学生までは 8～9 割程度の定員充足率を続けてきたが、平成 24 年度からは 4～5 割程度にとどまっている。現在は全校生徒 63 名、教職員 9 名である。

2 定時制はもう不要なのか？

生徒数の減少については、少子化による管内の中学校卒業生数が減少していることが原因として考えられるが、その速度以上に定時制課程入学者数の減少は激しい。

かつての定時制高校は、「働きながら学ぶことのできる学校」として存在価値を誇っていたが、徐々に、全日制高校をドロップアウトした生徒たちが集まる「荒れた学校」となっていく。高望みさえしなければ、ほぼ全員が全日制課程に入学できる現在、定着してしまった悪いイメージを払拭しきれていない定時制高校に、あえて入学を希望する生徒が少ないというのがその原因であろう。

しかし、少なくとも本校の現状を見る限りにおいて、例えば何らかの生きにくさを抱え、学校生活にうまく適応できなかった生徒たちなどにとって、「ゆっくりと、しかし確実に成長できる学校」としての新しい存在価値が期待されていると見ている。

3 新しい存在価値の具現化に向けて

実際、本校も他校を中途退学した過年度生が多く入学し、彼らが引き起こす問題行動への対応に追われてきた過去を持つ。しかし、入学者数がほぼ半減してしまった平成 25 年度以降は、入学者の大半を中学校時代不登校であった者や発達障害など何らかの困難を抱える生徒が占めるようになった。それに伴い、学校が徐々に落ち着き始め、昨年度には特別指導件数や退学者数が大幅に減少した。

これは、学び直しのできる教育課程と平成 24 年度から特別支援教育支援員の配置をもらうなど、特別支援教育の充実に努めてきたことが大きい。

とかく、学校が落ち着き始めると、大変だった時期と比べ、もうよいのではないかと考えてしまいがちである。しかし、「荒れていない学校」が本校のめざすゴールではない。

生徒たちが次から次へと引き起こす問題に対して対症療法的な「消極的生徒指導」に教員の多くの労力が奪われ、疲弊していた“不毛の地”から、そこまでの労力がそこに取られなくなった今、生徒指導に追われるのではなく、生徒の心を耕す予防・開発的な「積極的生徒指導」を充実させることによって、生徒が確実に育つ“肥沃な大地”と変えていくチャンスである。そんな学校体制を構築していくことが私の教頭としての使命である。

4 教頭として始めたこと

長年、問題行動に対応してきたため、学校の指導のなかに「負の行動を抑える」発想が根強く残っている。これに「正の行動を伸ばす」発想を増やしていくことが必要である。

このような意識改革を進めるためには、トップダウンで「変えよ」と指示をするよりは、先生たちの気付きをよび、そこから少しずつでも変わっていこうという“Let's”の姿勢で臨みたいと考えた。

そこで、まずは登校時の声かけ運動を毎日行うこととし、先頭を切って生徒と積極的に触れ合うことを心がけた。また、生徒の出席管理について、「来なければならない」と負の行動を抑える指導も当然必要であるが、「来た方がいいことがある」と正の行動を伸ばす指導もできないかと考え、1週間に区切った皆勤チャレンジ「湖定出席ラリー」を始めた。これは、先生たちの負担を増やすことなく、意識改革を進められればと願っての企画である。生徒の出席状況が劇的に変化したとまでは言えないが、わずかながらでも登校刺激にはなったらしい。その他の要因もあつてのことだが、中学校時代に不登校であった新入生の多くが普通に登校できるようになっている。

そこを起点として、先生たちに無理を強いるのではなく、一緒に学校改善の喜びを共有できることをめざし、少しずつ前進しようとして取り組んできたことを以下に述べる。

5 みんなが主役の校風づくり

「消極的生徒指導」に追われている時期には、生徒が学校や教員を否定する負の方向に力を発揮しようとしがちである。しかし、そのような雰囲気の中では、さまざまな困難を抱えて入学してくる生徒にまで手が回らず、成長させることは難しい。それまでの学校生活において、いじめなどの人間関係のトラブルなどから不登校になっていた生徒に同じことを追体験させるわけにはいかない。そのためには、それぞれの困難さえも個性として許容しあえるような温かい校風づくりが求められる。

生徒たちに「負の方向に力を発揮するくらいならば、先生たちと正の方向に力を発揮した方が楽しそうだ」と思わせることが理想である。そのために、教員が学校を盛り上げることに楽しそうにしている姿を見せるよう努めてきた。

幸いなことに、本校にはそれを進めて行く上で、いくつかの資源があった。

10年前の学校祭でオリジナルソング「この丘で…」が作られていた。この歌詞は大変秀逸で、定時制課程に通う本校生の応援歌となりうるものであった。さっそく、当時の卒業生に声をかけ、昨年度の学校祭で復活させてもらった。

また、本校演劇部の卒業生たちが「劇団オールドボーイズ」を立ち上げた。これらのことが新聞で紹介されることによって、生徒たちには、定時制であっても、がんばりさえすれば世の中から評価されることが理解できたであろうし、誇りを持てたのではないだろうか。

今年度については、部活動でチームとして必要な人数が集まらず、大会出場さえ危ぶまれていたのだが、教員が一丸となって声をかけ続けた結果、一気に加入者が増え、逆に部活動加入率が40%まで上昇した（昨年度29.7%）。それを聞きつけた卒業生が練習を手伝いに来るなど、いい方向につながり、学校が活性化しつつある。

学校にワクワクできるものを多くしていくことで、みんなが主役になれる校風をつくっていききたい。

6 成長へのシステムづくり①～学び直しによるわかりやすい授業の構築

本校では、学び直しによってわかりやすい授業の工夫改善を進めてきた。数学科の教員から授業に学生ボランティアを入れたいとの要望が寄せられた。その後、基礎学力に不安を抱える生徒の学習支援を行う研究指定の募集があり、積極的に手をあげさせてもらった。研究指定により基礎計算力に差が大きい1年生の数学に大学生2名による学習支援を入れることができた。中学校で軽度の知的障害を指摘された生徒たちも、彼らの支援を受けながら基礎計算力を伸ばすことができた。この事業は単年度であったが、今年度は近隣の大学に依頼し、後期から学生ボランティアが学習支援に入る予定となっている。

7 成長へのシステムづくり②～つまずきの段階からの支援

これまでも本校では、いろいろな活動を通じて生徒理解に努めようとする機運が高かった。登校時の声かけ運動や年4回実施される担任による教育相談、そして、特別支援教育支援員とコーディネーターによる定期面談等、あらゆる局面を使い、生徒理解に努めてきた。また、そこで得られた情報については、毎月全教職員が参加して開かれるサポート会議において共有されている。

そのような活動などから、本校教職員は生徒のことを真剣に考える集団となっている。実際、行事のときに同級生との関係がうまくいっていなかった女子生徒について、職員室で“誰にアプローチさせてクラスの輪の中に入れるべきか”炉辺談話を始めたところ、「自分の授業で見ている人間関係から推測すると、こちらの人物の方がよいのではないか」などと意見の輪が広がり、気が付けば勤務時間が終わっているのに、全教員が1時間ほど残り、臨時サポート会議の様相を呈したこともあった。

昨年度末の反省会議の中で、進路指導に関して「進路指導以前の段階から指導が必要ではないか」といった議論が出された。本校はくしろ若者サポートステーションとの連携により、充実した進路指導が行われている。しかし、就職するという意識の希薄さや、ソーシャルスキルの低さといった問題に手を加えずに、最後の仕上げだけががんばっても思うような成果は上がらないという問題意識である。

今年度は、そこから指導をしようということで、総合的な学習の時間の見直しを行った。

人間関係形成能力が低い生徒が多い現状にあわせ、構成的グループエンカウンター、アサーショントレーニング、ソーシャルスキルトレーニングなどの心

理的アプローチを行う時間を導入し、対人能力の向上を図ることとした。

また、思いの外、生徒にとってはバスに乗って目的地にたどり着くということに対する心的抵抗が大きいことがわかった。バスの路線や時刻表をどう調べ、バスに乗ってどのような手続きをすればよいのかを指導し、実際に何箇所か施設を巡ってスタンプを集めてくるというようなバスを使ったオリエンテーリングの実施を検討している。

8 成長へのシステムづくり③～成長カルテシステムの構築

診断の有無にかかわらず、生徒たちの抱える困難さへの理解は進んでいる。しかし、それを成長につなげる戦略面での弱さは存在していた。生徒の「できません」に対して、「わかるよ」と理解を示すことができても、その後、どうしたら良いかという戦略については及び腰になってしまいがちである。たとえ、どのような診断がついていようとも、今できないことは未来永劫できないことを意味しない。まして、学校が生徒を成長させられなかった口実に診断名を利用するようなことがあってはならないし、生徒が診断名を盾に「できないのでやりません」というように成長を拒否する行動を取ろうとすることを容認するわけにもいかない。たとえほんの少しであっても、彼らを確実に成長させていくためには、「できません」に対して、そこから一歩進めて「じゃあ、どうすればできる？」と考えさせ、そのための道筋をともに考えていくことが重要である。

本校の場合、教職員のチームワークの良さから日常的に「このように指導するから、フォローを頼む」というような役割分担はなされている。それらをより構造的にやれるようにしようということで、特別支援教育支援員の指導を受けながら、すべての生徒に対して、成長課題と指導の経過を逐一記録するための個別指導計画「成長カルテ」の書式について検討を続けてきた。今年度からさっそく使い始めているが、その記録を残す手間に相応するだけの意義を感じてもらえなければ、継続は難しい。一見目立たずにいるが、成長課題を抱えている生徒に対して戦略的な指導が進むことを期待している。

9 成長へのシステムづくり④～福祉的な観点の充実

昨年4月、4年生に在籍していたS君から相談が寄せられた。保護者（実母の姉）による虐待についてであった。満足な食事や衛生環境が与えられず、精神的に病んでいた保護者がとる行動によって、彼の安全・安心が脅かされる劣悪な環境にいたことが判明したことから、早い段階で児童相談所、スクールソーシャルワーカー、市生活福祉事務所、NPO、警察署少年係と連携して準備を進めた。最終的に、6月に彼は保護者のもとを離れ、自活する道を選んだのだが、彼が自活を決意した当日には、生活保護の支給対象を彼1人の単身世帯に切り替えることが決定するなど、無事に新たな生活へのソフトランディングをさせることができた。

彼は、口数が少なく、人間関係形成能力の低さが課題であると認識されていたのだが、実は小学校2年のときには、母親の再婚相手の義父から虐待を受けていたことが判明した。義父の連れ子との生活に問題が発生したため、実母は姉にわが子を預け、義父との生活を選んだのだという。彼の現在の問題としての人間関係形成能力の低さは、彼の成育歴や家族の状況といった福祉的な観点も含めて捉えなければ、彼の成長支援は難しいことが理解できた。

また、彼を自活させてからさまざまな支援を行う中で、信じがたいほどソーシャルスキルが身につけていなかったことも判明した。これは、彼の心理的な課題だけではなく、社会体験の欠如がもたらせたことが原因であった。

表層としてあらわれる行動的な問題の背景に福祉的な問題を抱える生徒も少なくない。実は、釧路市は生活保護率 55%（18 人に 1 人が受給）、人口 1 人当たりの生活保護費が 86 千円（ともに平成 24 年度）と北海道内でトップの厳しさを抱える市町村である。市の行っている彼らの自立支援プログラムは全国的にも先進的な取組として注目されている。定時制に通う生徒の家庭は、生活保護受給対象である率が高いことから、福祉関係の機関との連携も視野に入れながら、心理的なアプローチだけでなく、家族内の問題も含めた福祉的なアプローチも加えて、より総合的な成長支援体制を構築していく必要性を感じている。また、成長カルテの家族欄については、家族関係を図示できるスタイルへ変更するなど検討も進めているところである。

10 おわりに

学校長からは「明るく風通しのよい職場」を期待すると言われている。日ごろの教職員間のコミュニケーションの充実が“明るく”の基本であるのは間違いない。ただ、そこをさらに進め、日ごろの業務において、充実感をもって取り組むことができるようになれば、より明るい職場にできるのではないかと考えている。

本校は、ちょうど学校の空気が変わる転換点にある。そういう時期だからこそ、かつての負のスパイラルを脱して、予防・開発的な生徒指導の充実という未来への種まきを続けることで、悪い時期に戻らない体制づくりを進め、生徒・保護者・地域から信頼される“確実に成長できる学校”をめざしていかなければならない。

教職員の意識改革を進める旗振り役として、また、さまざまな課題を抱える生徒たちを導くために、外部のさまざまな機関との連携を進めるパイプ役としての教頭の役割は大きい。

学校をよく変化させそうとしている教員たちが楽しそうに活動し、それが伝播するののかのように、生徒も楽しそうに活動し始める。それが保護者や同窓生、地域にも伝わっていく。そうして学校全体が楽しそうになっていくと、加速度的によい変化が続けざまに起きていく。

来る定時制課程 100 周年という大きな節目に向け、そんな学校に少しでも近づいて行けるよう努力していきたい。

この原稿は、7 月 30～31 日に神戸市にて行われた「平成 27 年度 第 66 回全国高等学校定時制通信制教頭・副校長協会教育研究協議会」の第 2 分科会（生徒指導）での発表要旨をまとめたものである。